2020 年度　成城大学博士学位請求論文　審査報告

論文名　The Spaces of Charlotte Brontë's Writing: Domesticity, Emigration and Markets in Victorian Women's Culture　（英語論文）（本報告は内容を日本語に置き換えて行う。）
（訳題「シャーロット・ブロンテの小説における空間―ヴィクトリア朝女性文化にみる家庭生活、移住、そして市場」）

提出者　Mai Osawa（大澤 舞）

〔論文の内容の要旨〕

本論文は、19 世紀イギリス文学を代表する小説家シャーロット・ブロンテ（1816－55）の主要 4 作品を、家庭生活と経済的自立との矛盾を抱えるヴィクトリア朝の女性読者に、その独自の解決策を提示する小説として読解するものである。当時の中流階級女性は家庭への献身を社会から求められていたが、ブロンテは女性の海外移動や金融経済活動を描くことで、産業革命以降に明確に分離された女性の私的／公的領域間の境界線の引き直しを試みていると見る。それによって、女性たちの社会との新たな関り方を模索し、私的／公的・両領域における女性どうしの絆の重要性を強調する、現実的で現代的な女性作家としてのブロンテ像を明らかにした。

本論文は以下のように構成されている。

序論
　1．「未婚女性」作家としてのブロンテ
　2．ブロンテ作品における経済活動
　3．文学界における女性作家の居場所
　4．ブロンテ作品批評概説
　5．ギャスケルのブロンテ像の脱神話化
第 1 章　「マデイラの「いかがわしい商人」―『ジェーン・エア』における遺産継承と女性による投機」
　1．序
　2．「マデイラのいかがわしい商人」―ジョン・エア、ワインとマデイラ島
　3．マデイラ史―ワインの生産と貿易
　4．新中流階級の富と金融取引
　5．ヴィクトリア朝時代の女性の投資文化

6．結
第２章　「「私の居場所はいったいどこにあるのか？」―『シャーリー』における文学の効用と女性文化」
1．序
2．ラッダイト運動におけるロバート・ムアの「誤った兄弟愛」
3．公的領域と私的領域の交錯
4．文学を通じての女性間の親密さ
5．シャーリーの遺産継承と女性どうしの絆
6．ロバートの女性性と女性の絆への支援という償い
7．結
第３章　「「イングランドに来てごらん、わが国の体制の動きをその目で見るといいんだ。」―『教授』におけるたたき上げ男性の理想化されたイングリッシュネス」
1．序
2．ブルジョアたるべきか、たらざるべきか
3．コスモポリタン都市ブリュッセルで英語の「教授」であること
4．他者の声によって理想化されたイングリッシュネス
5．「立身出世物語」の背後に
6．結
第４章　「「私はどこから来て、どこへ行き、何をしたらいいのか？」―「未婚女性」小説の書き換えとしての『ヴィレット』」
1．序
2．イングランドに真のわが家なし
3．「移民未婚女性」としてのルーシー・スノー
4．「コスモポリタン都市」としてのヴィレット
5．ルーシーのロマンスと屋根裏の尼
6．ルーシーの自立にとってのポールの死
7．結
結論
文献目録

以下に章ごとの内容を要約する。

序論

シャーロット・ブロンテは、未婚女性を描くその作品で、男性作家たちによって使われてきた物語形式（教養小説、産業小説、立身出世物語等）をアイロニカルに用い、「家庭生活」を否定することのない、しかし従来とは違う新しい自立した女性像を、たとえば金融経済の

動向などとの関りの中から作り上げたと捉える。つまり、家庭空間を維持しつつもそれを横断する女性たちの交流や社会・経済活動を描くものとしてブロンテ作品を読解するという問題設定である。それにより、荒涼たる原野の牧師館の閉鎖空間に暮らす不遇な女性作家という従来のブロンテ像は、女性読者に新しい社会生活を提案する、野心的、精力的、かつ戦略的な女性作家のそれへと転換されることになる。

第 1 章

本章では、デビュー作『ジェーン・エア』（*Jane Eyre,* 1847）の主人公ジェーンがポルトガル領マデイラの「いかがわしい商人」である叔父ジョンから相続する遺産に注目し、女性の社会的生活空間の広がりを論じる。イギリス人商人の貿易ネットワークを通じたマデイラ・ワインのグローバルな取引に加え、マデイラからイングランドへの投資によるジョンの資産の移動が、その相続によるジェーンの金融市場への関わりを示す。こうした背景から、ジェーンが引き継ぐジョンの富と、西インド諸島の大農園経営で財を成す地主階級のロチェスターの富との相違が、2 人の結婚において持つ意味が分析される。ジェーンの経済的自立とロチェスターとの結婚の両立は、当時の法律や家庭重視のイデオロギーによって妨げられるが、ブロンテは結婚という慣習的な形態以外のオルタナティヴな男女関係を示唆することで、その困難な両立を達成する方法を模索している。

第 2 章

『シャーリー』（*Shirley,* 1849）は、工場の機械化に反対する 19 世紀初頭のラッダイト運動を背景とする「産業小説」である。本章の問題設定は、イングランド系ベルギー人の工場主ロバートと労働者たちの男性間の闘争を描くメインプロットの中に、女性たちが親密な関係を結ぶプロットが組み込まれているとするものである。彼に心を寄せる女性主人公キャロラインは、彼にシェイクスピアを読ませ、その教訓から、彼の利己主義や産業ブルジョワとしてのプライドが生み出す「誤った兄弟愛」を指摘し、労使関係悪化の原因である尊大な態度の矯正を試みる。その場面は男女の私的領域と公的領域の交錯点であるが、ロバートの酷薄な対応に失望したキャロラインは、未婚女性として生きてゆくことの不安に直面する。それを緩和すべく、ブロンテは、女性間の精神的・経済的相互援助を重視する。女性たちが公的空間としての社会・経済活動に参加しつつ、家庭生活や私的空間での女同士の交流を模索するものとして本作が読解される。

第 3 章

本章は、男性主人公の海外経験を描いた『教授』（*The Professor*、1847 年に執筆）を取り上げ、移住が男女それぞれにもたらす体験の意味の相違を論じる。イングランドで産業ブルジョワとして成功できなかったウィリアムは、ベルギーに移住し、母国語を活かして英語教師となる。彼は異国でイングランド人である自らの優等性を再認識するだけでなく、英語教

師という立場の優位性を意識化する。投資によって富を増やし、ジェントルマンへと成り上がる。その成功を影で支えるのはイングランド系スイス人女性フランシスであるが、彼女は彼の教育によって、ヴィクトリア朝時代のいわゆる「家庭の天使」へと変えられていく。本章では、男性の「立身出世物語」が女性を変容させることなしには成り立たないというブロンテの批判的な視線が読み込まれる。

第 4 章

イギリス国内の未婚女性を植民地へ送り込むというヴィクトリア朝の社会政策を踏まえて『ヴィレット』（*Villette*, 1853）を論じた章である。当時イギリスで増えつつあった未婚女性たちは「余った女たち」となって社会を堕落へと導くと批判され、海外移住先で結婚相手を見つけるべきとする言説が流布していた。未婚の主人公ルーシーは、ブリュッセルがモデルのコスモポリス、ヴィレットに移住する。英語教師として働きながら自立を目指す彼女の恋愛は、未婚女性を象徴する尼の幽霊とフランス領グアダルーペへの婚約者の赴任によって遮られる。そのため、彼女はロマンスの成就としての結婚による「本当の家」を手に入れることはできない。だがブロンテは、夫婦によって成り立つ「家庭」とは異なる新たな「家庭」のあり方を読者に示している。この章では、この作品が、未婚女性に対する排他的な言説をアイロニカルに組み込みながら、「家庭」の機能も兼ね備えたルーシーの女子寄宿学校の経営を描くことで、女性たちのつながりを維持する新たな空間の形成を試みたものであることが証明される。

結論

『ヴィッレット』の完成後に執筆が開始された未完の小説『エマ』は、主人公の女子寄宿学校の経営という前作を受け継ぐ設定によって、自立した女性の「空間」がより広がる可能性を秘めていたとする推察から本論文の結論が示される。作家自身が結婚生活によって執筆活動を停止する。4 作品の主人公たちが抱える家庭生活と経済的自立の矛盾は、ブロンテ自身のそれと重なる。主人公たちはその矛盾の解決の可能性を、社会・経済的活動への参加と女性どうしが結びつきあう「空間」の創造によって示した。一方、女性作家の創造の場＝「空間」の獲得は、ブロンテ以後の世代の女性作家たちに委ねられるべき課題となる。

〔論文審査の結果の要旨〕

序論で紹介され、また本論でも説かれるように、ブロンテ研究は 1970 年代以降、おもに階級、ジェンダー、人種の問題に注目し、優れた成果を上げてきた。本論文はそれらの、それぞれに独自の、また相互に関連しあう多様な先行研究を十分に検討し、それらの成果の上に、社会・経済的グローバル化の中で変容する女性の家庭生活と経済的自立との間の矛盾に対する独自の解決策をシャーロット・ブロンテの作品に読み込むものである。

上述した既存のブロンテ研究が、概して、社会・経済的な文脈を重視し、作家の言説をその中に位置づけて理解することにその目的が置かれるのに対し、本論文は、その詳細な読解によって、ブロンテ作品の女性主人公や登場人物の活動・活躍を、女性の私的／公的「空間」の移動、獲得、共有といった、作品の内在的な力学の問題として捉えることに特質がある。女性登場人物が、ヴィクトリア朝家父長制社会にあって、家庭に縛られることなく自立し、また女性どうしがさまざまな関係のもとに結びつきあう多様な「空間」の中に表象される。私的生活の場である「家庭」のほかに、大陸への「移住」による新しい生活空間の獲得、未婚女性とその価値が交換される「結婚・労働市場」、そしてグローバルな経済活動とそれに伴う「金融市場」など、女性が参画するそれら現実の、また仮想の多様な「空間」の重なり合いの中に女性とその生活が描かれているとする仮説は独創的であり、各章におけるその論証には十分な説得力がある。

本論文のもう一つの独創性は、社会的な慣習や制度の中に身を置きつつ自立を模索する女性を描くブロンテ作品に、女性作家ブロンテ自身の言説行為の戦略を読み込んでいることである。ブロンテは、それまでもっぱら男性作家が男性主人公を描く小説で特権的に用いてきた物語形式、すなわち、教養小説、産業小説、立身出世物語等の枠組みをアイロニカルに用い、家庭の規範から逸脱しない範囲で、男性中心社会において、女性たちが自立を目指して結びつき合う空間の創造を実験的に行ったとしている。つまり、「家庭生活」を否定することなく、しかし従来の成人女性の理想像である「家庭の天使」ではない女性像を、母語、外国語、移住、金融経済などのテーマを用いることで作り上げたと捉えている。家庭空間を維持しつつも、それを横断するような女性たちの活動や交流が描かれ、それが新たな女性の自立の表象となっているとの指摘である。社会・経済史的知識と近代小説のジャンルについての文学史的理解に基づくこの独自の論評は見事であり、本論文の文学論として最も重要かつ優れた議論である。

ただし、本論文の論証にはいくつかの疑問点が無くもない。1．ヴィクトリア朝の女性の社会・経済的進出をめぐるいくつかの議論において、その前提となる歴史的事実が第 2 次資料による傍証の域を出ない場合がある。2．小説で表象される空間が女性の変容する外在的な生活空間の隠喩となっているとする独創的な捉え方の理論的な説明が必ずしも十分になされていない。3．提出者は、本論文によって、同時代作家エリザベス・ギャスケルによる伝記が提示した、荒野の館の閉鎖空間で暮らす不遇な環境に耐える女性作家としてのブロンテ像が、女性の生き方の新しいモデルを提案する、野心的、精力的、かつ戦略的な作家としてのそれへと変更されるとしている。だとするなら、社会に対し果敢に発信をするブロンテの言説行為が、同時代の女性読者にどのように受容され、どのような社会的影響を及ぼしたかについての論究が求められる。とはいえ、これらの問題点は、一方で、詳細な読解が導き出した本論文のテーマ自体が、十分な普遍性と発展性を含むことを示すものであるとも言える。提出者のみならず、他の研究者によるさらなる考究が期待される所以である。その意味でも、本論文のブロンテ研究、イギリス近代文学研究への貢献が大であることは明ら

かである。

　なお、全編を通じ英語での論述の質は高く、出版されれば国内外の高い評価が十分に期待できる。